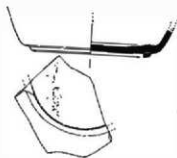


大宰府条坊跡 52

—第 259・290・319・343 次調査—



第 259 次 S0005 灰色砂質土須恵器

令和 6 年
(2024)

太宰府市教育委員会

序

本書は、平成18年度から令和3年度までに発掘調査を行いました大宰府条坊跡の埋蔵文化財発掘調査報告書です。大宰府条坊跡は古代における都市遺跡として全国的にも知られ、現在の市街地に広がる遺跡です。

今回報告する地域は、大宰府条坊跡の中でも南西に位置し、近傍には字「市ノ上」があり、木製人形やイスラム陶器をはじめとする出土遺物の多様さから大宰府の「市場」と推定される場所の周辺にあたります。今回報告する調査地からは、奈良・平安時代における道路や道路に関わる区画溝をはじめとする遺構や、鶯田川が平安時代に氾濫した痕跡など、当時の生活の痕跡を物語る遺構や遺物が出土しております。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、文化財行政に対して御理解いただきました皆様をはじめ、関係された諸機関の皆様にご心からお礼申し上げます。

令和6年3月
大宰府市教育委員会
教育長 井上和信

例言

1. 本書は、太宰府市教育委員会が行った平成18年度から令和3年度までに実施した、大宰府条坊跡第259・290・319・343次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書に掲載した調査原因、調査期間等の調査に関わる経緯については、各調査の報告文にて記載している。
3. 本書に掲載した調査年度は、複数年次実施してきたため調査組織は第Ⅱ章にまとめている。
4. 調査方法、現場での記録取得手法、整理報告の手法については『太宰府市における埋蔵文化財調査指針(2001年9月改訂)』に基づき実施している。
5. 遺構の実測は、主として各調査担当者が行い、報告書作成にあたって出土遺物実測等については、第Ⅱ章記載の整理作業参加者が行った。
6. 遺構の写真撮影は、適宜、調査担当者が行い、空中写真撮影は(有)空中写真企画が行った。また遺物の写真撮影は、(有)システム・レコが行った。
7. 遺構実測図および遺構配置図は全て国土調査法第Ⅱ座標系を基準とし、図中に記載される方位は、特に注記のないかぎり座標北(G.N)を指している。磁北と座標北との偏差は西偏6°30'(1992年)である。
8. 出土した金属製遺物の応急処置は、狭川麻子、山中幸子、下川可容子が担当した。
9. 本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。

条 259 SD 010

遺跡名 調査回数 遺構種別 遺構番号

10. 本書の執筆は、目次に記した担当者が執筆し、編集は中島恒次郎が行った。
11. 調査時の取得情報(図面・写真など)、出土遺物および図面・写真などの記録は太宰府市教育委員会が保管している。
12. 本書に用いた分類は以下のとおり。
須恵器・・・太宰府市教委『宮ノ本遺跡Ⅱ 一 窯跡篇一』(太宰府市の文化財第10集)1992
土器・・・太宰府市教委『大宰府条坊跡Ⅱ』(太宰府市の文化財第7集)1983
陶磁器・・・太宰府市教委『大宰府条坊跡Ⅳ』(太宰府市の文化財第49集)2000
瓦・・・九州歴史資料館『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』2000
焼壺壺・・・森田勉(1983)「焼壺壺考」『大宰府古文化論叢』下巻 pp.397-420 吉川弘文館
石鍋・・・森田勉(1983)「滑石製容器」『佛教芸術』148号 pp.135-148 毎日新聞社

目次

I. 遺跡の位置と歴史	1
II. 調査体制	4
III. 調査および整理方法	6
IV. 調査報告	
1. 第259次調査 (中島)	7
(1) 調査に至る経過	7
(2) 基本土層	7
(3) 検出遺構	7
(4) 出土遺物	9
(5) 小結	21
2. 第290次調査 (高橋)	25
(1) 調査に至る経過	25
(2) 基本土層	25
(3) 検出遺構	25
(4) 出土遺物	27
(5) 小結	28
3. 第319次調査 (中村)	31
(1) 調査に至る経過	31
(2) 基本土層	31
(3) 検出遺構	31
(4) 出土遺物	32
(5) 小結	35
4. 第343次調査 (福盛)	37
(1) 調査に至る経過	37
(2) 基本土層	37
(3) 検出遺構	37
(4) 出土遺物	39
(5) 小結	44
V. 結び	46 (中島)

写真図版・・・主な遺構および遺物写真

CD・・・遺構および遺物写真

紀年銘	AD	大宰府土器型式	編年区分	国産陶器型式 (型式の上層)		標識磁器	準標識磁器		
				灰釉	鉄釉				
⑥	700	I	A	↑↑	獵控0-10 井ヶ谷16-78	長門?・瀬内	白磁I類 越州系青磁I, II類 長抄系青磁・黄釉 褐彩・褐釉	唐三彩・二彩 絞胎	
	725		B						
	750	II							
		III							
	800	IV							
⑦	800	V	(A古)	↑↑	獵控0-10 井ヶ谷16-78	長門?・瀬内	白磁I類 越州系青磁I, II類 長抄系青磁・黄釉 褐彩・褐釉	唐三彩・二彩 絞胎	
	825								A
⑧	850	VI	B	↑↑	獵控0-10 井ヶ谷16-78	長門?・瀬内	白磁I類 越州系青磁I, II類 長抄系青磁・黄釉 褐彩・褐釉	唐三彩・二彩 絞胎	
	850		A						
	900	VII							
	925	VIII							
	950	IX	(A新)						
⑨	1000	X	↑↑	↑↑	虎頭山1 (新戸0-53)	近江	越州系青磁III類 白磁XI類	青磁褐彩・褐釉 初期イスラム陶器	
	1050	XI							B
⑩	1100	XII	A	↑↑	丸石2 百代寺 東山井-105 龍岡5-1		白磁III, IV, V, VI, VII類 III, IV, V, VI, VII類	初期龍泉系・同安系青磁0類 越州系青磁 初期高麗青磁I, II, III類 青白磁	
	1100		B						
	1150	XIII	C						
⑪	1150	XIV	↑↑	↑↑	丸石2 百代寺 東山井-105 龍岡5-1		龍泉系青磁III-1~4, 6 III類 同安系青磁III-1~IV, III類	初期龍泉系・同安系青磁0類 越州系青磁 初期高麗青磁I, II, III類 青白磁	
	1200	XV							D
	1230	XVI							E
	1250	XVII							F
⑫	1300	XVIII	↑↑	↑↑	丸石2 百代寺 東山井-105 龍岡5-1		龍泉系青磁III類 白磁IX類	龍泉系青磁II-c類 白磁IX類 黒胎陶器	
	1330	XIX							G
⑬	1350	XX	↑↑	↑↑	丸石2 百代寺 東山井-105 龍岡5-1		龍泉系青磁IV類	白磁IX, C類 安南鉄胎	
	1400								
⑭	1500								

- 紀年銘資料 ①A. D. 927 延長5年, 大宰府74次SD205A溝
 ②A. D. 1091 寛治5年, 平安京左京4条1坊SE8井戸
 ③A. D. 1224 貞成3年, 大宰府33次S0605溝
 ④A. D. 1304 嘉元2年, 大宰府109, 111次S03200溝
 ⑤A. D. 1330 元徳2年, 大宰府45次S1200池
 ⑥A. D. 784 延暦2年, 長門県102次SD10201溝
 ⑦A. D. 1459・1465 長祿3・寛正5年, 福岡市井相田C11・S016池
 ⑧A. D. 1501 文亀元年, 大宰府70次S01805溝
 ⑨A. D. 1265 文永2年, 博多62次713土溝

図1 大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁編年

I 遺跡の位置と歴史

太宰府市は、北に四王寺山、北東に宝満山、西に背振山地、南に脊振山地東端の天拝山に囲まれ、盆地的な様相を示している。これらの山々が途切れている北西に福岡平野が、南東に筑紫平野が広がっている。

旧石器時代や縄文時代の遺物や落とし穴などの遺構は、市内各所の調査で散見されるが、集落などのまとまりとしての確認はなされていない。弥生時代になると、市内の周縁部の平地や微高地に集落が営まれ、弥生時代中期には高雄地区の吉ヶ浦遺跡や国分地区の国分松本遺跡で甕棺墓群や集落が形成される。古墳時代には前期から中期にかけて、割竹形木棺を内部主体とする円墳（菖蒲浦、下高尾、宮ノ木）が、5世紀中頃には、福岡平野を見渡す丘陵に帆立貝形前方後円墳の成屋形古墳が築造され、6世紀に入り、四王寺山や高尾山の裾地に円墳が僅かに築造されている。未調査ながら大宰府政庁跡北側、四王寺山南麓に群集墳と思わしき遺跡がある。

7世紀後半になると古代官司大宰府が置かれ、博多側には四王寺山と吉松丘陵を塞ぐ水城跡の土塁が築造されたほか、周囲の山々には大野城・基肆城・阿志岐城などの古代山城が築造された。平成28年(2016)には筑紫野市前畑遺跡で丘陵上に築造された土塁が発見され、周囲の古代山城と合わせ、大宰府外郭施設を形成していた可能性を示すものとして注目されている。

大宰府政庁跡は、7世紀後半～12世紀前半にかけて、大きく三時期に分かれ、Ⅰ期は掘立柱建物、Ⅱ・Ⅲ期は瓦葺きの礎石建物と考えられている。その周辺には官衙群が広がり、政庁東側には学校院が設けられ、その東隣にはかつて「府の大寺」と呼ばれた観世音寺があり、現在でも礎石群や仏像群がその隆盛を物語っている。

政庁を北辺中央に置いた南側一帯には、大宰府条坊（周知の遺跡の範囲、以下「条坊」）と呼ばれる都市が形成され、条坊の中央やや南側では、大型掘立柱建物が並んで見つかり、佐波里製の甕など高級食器も出土するなど、外国使節を安置・供給する客館跡と考えられている。条坊の規模は南北22条、東西12坊の約2km四方におよぶものと推定され、南域は筑紫野市まで広がり、『続日本紀』神護景雲3(769)年10月甲辰の条に「此府人物殷繁、天下之一都会也」と記され、同じく『続日本紀』宝亀元(770)年3月甲申の条には「大宰管内大風、城官舍百姓并廬舎一千卅餘口」と記され、都市空間を形成していたと考えられる。今回報告する地点の南西部は、字「市ノ上」と呼称され大宰府の西市が推定されている地に隣接している。

条坊の外側、西域に位置する向佐野地区の宮ノ本遺跡では、奈良時代の須恵器生産窯のほか平安時代前期から中期にかけて官人墓地が確認され、買地券や鏡など多くの貴重な副葬品が出土している。条坊の北西には、筑前国分寺や国分尼寺が造られ、その近くに位置する国分松本遺跡では、7世紀末の戸籍計帳関係の木簡が出土している。

中世になると人々の生活の中心は、観世音寺前面付近から五条や太宰府天満宮周辺など、かつての条坊城の東部へ移る。また、五条地区の一画では、13世紀後半～14世紀前半頃の梵鐘鑄造土坑や溶解炉が多数見つかり、大規模な鑄物工房が存在したことがわかっている。宝満山を含め寺社を中心にその周辺一帯は高い密度で遺構が展開している。また、周辺の山々には岩屋城や有智山城など九州の戦国史に名を残す山城が築造され、激しい戦いが繰り返されている。

近世の太宰府は、中世から引き続き太宰府天満宮を中心に宰府や五条の町ができ、街道筋の集落として通古賀が形成されているが、その周縁に位置する他の集落は都市近郊型の農村集落であった。その後、昭和40年代以降宅地化が進み住宅街へと変化している。

図 2. 太宰府市とその周辺の遺跡 (1/20,000)

図 3. 調査地とその周辺調査地点 (1/4,000)

II. 調査体制

本書に掲載した調査は、複数年にわたり実施したため、以下に各年度の調査組織について年度ごとに記述する。なお、調査担当者については、各調査報告の中に調査に至る経過として記述しているが、ここではゴシック体の活字にて記述しておく。整理作業年度については適宜実施してきているが、主に作業を行った令和4年度・5年度の組織を記載している。

■大宰府条坊跡 第259次調査（平成18／2006年度）

統括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	松永栄人
	文化財課長	齋藤廣之
	保護活用係長	久保山元信
	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	齋藤実貴男 吉原慎一（7月1日～）
	事務主査	大石敬介（～6月30日）

調査

主任主査	城戸康利 山村信榮 中島恒次郎
技術主査	井上信正
主任技師	高橋 学 宮崎亮一
技師（嘱託）	柳 智子 下高大輔

■大宰府条坊跡 第290次調査（平成23／2011年度）

統括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	齋藤廣之
	文化財課長	井上 均
	保護活用係長	菊武良一
	調査係長	池本義彦
	事務主査	橋川史典
	主事	古川あや
調査	主任主査	山村信榮 中島恒次郎 井上信正
	技術主査	高橋 学 宮崎亮一
	主任技師	遠藤 茜
	技師（嘱託）	白石溪苒
	文化財課事務取扱係長	城戸康利（都市整備課 景観・歴史のまち推進係）

■大宰府条坊跡 第319次調査（平成28／2016年度）（平成29／2017年度）

統括	教育長	木村甚治
庶務	教育部長	緒方扶美
	文化財課長	城戸康利
	保護活用係長	江坂研治

	主任主査	廣見京子 高橋 学
	主事	有田ゆきな 久木原駿史 伊藤裕貴（文化庁記念物課研修、7/1～）
	調査係長	山村信榮
	主任主査	井上信正 宮崎亮一
	主任技師	遠藤 茜 沖田正大 中村茂央
（平成 29 / 2017 年度）		
統括	教育長	木村甚治（～12月） 樋田京子（3月22日～）
庶務	教育部長	緒方扶美
	文化財課長	城戸康利
	保護活用係長	江坂研治
	主任主査	井上信正 高橋 学
	主任主事	岡部大治（再任用）
調査	主事	久木原駿史 伊藤裕貴（文化庁記念物課研修）
	調査係長	山村信榮
	主任主査	宮崎亮一
	主任主事	有田ゆきな
	主任技師	遠藤 茜 沖田正大 中村茂央

■大宰府条坊跡 第343次調査（令和3 / 2021年度）

統括	教育長	樋田京子
庶務	教育部長	藤井泰人
	文化財課長	友添浩一
	副課長	中島恒次郎
	保護活用係長	井上信正
	主任主査	高橋 学 城戸康利（再任用）
調査	主任主事	岡部大治（再任用）
	主事	篠田由梨
	調査係長	山村信榮
	技術主査	遠藤 茜 沖田正大
	主任技師	中村茂央 木村純也

■整理・報告（令和4 / 2022年度・令和5 / 2023年度）

（令和4 / 2022年度）		
統括	教育長	樋田京子（～12月24日） 井上和信（12月25日～）
庶務	教育部長	藤井泰人（～10月31日） 中山和彦（11月1日～）
	教育部理事	藤井泰人（11月1日～）
	文化財課長	中島恒次郎
	保護活用係長	井上信正
	主任主査	高橋 学

	主任主事	坂口 健
	主事	篠田由梨
調査	調査係長	山村信榮
	主任主査	遠藤 茜 沖田正大
	技術主査	中村茂央
	主任技師	木村純也
	技師	福盛雅久
(令和5 / 2023年度)		
統括	教育長	井上和信
庶務	教育部長	中山和彦
	文化財課長	山村信榮
	保護活用係長	井上信正
	主任主査	沖田正大
	主任主事	坂口 健
	主事	篠田由梨
調査	調査係長	高橋 学
	主任主査	遠藤 茜
	技術主査	中村茂央
	主任技師	木村純也
	主任主事	中島恒次郎 (再任用)
	技師	福盛雅久

Ⅲ. 調査および整理方法

調査および整理方法については、『佐野地区遺跡群1』(太宰府市の文化財第14集 1989)、『太宰府市における埋蔵文化財調査指針』(太宰府市教育委員会 2001年9月改訂)に基づいている。

調査では、表土剥ぎをバックホーによって行った。遺構図や土層図は適時1/10、1/20等で記録し、整理に際し、時期が特定できそうな遺物については、実測作業を行っている。一緒に出土している遺物については、出土遺物一覧表も同時に確認して頂きたい。

これらの調査で得られた出土遺物や実測図等は太宰府市文化ふれあい館に保管している。

IV. 調査報告

1. 大宰府条坊跡 第 259 次調査

(1) 調査に至る経過

都府楼南 4 丁目 812-21、812-24 に所在し、専用住宅建設に伴う地下室建設に際して国庫補助事業として埋蔵文化財記録保存調査を実施した。開発対象面積は 429 m²、調査面積は、43.7 m²を測る。調査期間は平成 18 年（2006）4 月 17 日から同年 5 月 12 日、調査は井上信正、下高大輔が行った。報告は、中島恒次郎が行った。

(2) 基本土層（図 5）

地表面から 1.2m ほどが現在の宅地造成に伴う盛土層で、その下位 0.3m の層厚で遺構検出時の土層とした暗茶灰色土が堆積している。暗茶灰色土除去後、259SD001 として調査を行い、259SD001 除去後、南北の溝堆積層を複数確認している。

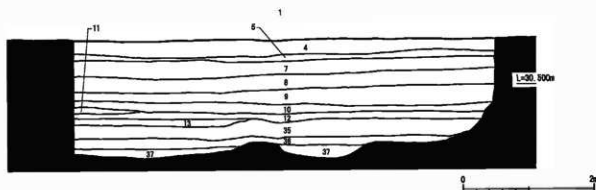
前後関係から複数の遺構として調査を行ったが、基本的に南北の溝の複数回にわたる堆積層個々を除去していった。

(3) 検出遺構（図 4）

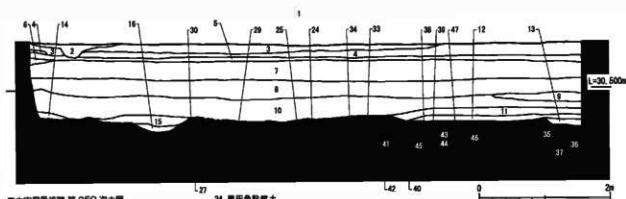
259SD001 調査区全体に検出したもので、遺構を形づくるものであるのかは、定かではない。上位から暗茶色粘質土→暗灰色粘質土が堆積している。

図 4. 大宰府条坊跡第 259 次調査遺構配置図

調査区東壁土層実測図



調査区北壁土層実測図



大宰府条坊跡第 259 次土層

- | | | |
|---|--|--|
| <p>1 造成土
2 淡灰色粘質土〔礫を含む〕〔造成土〕
3 暗灰色粘質土
4 灰色粘質土〔水田耕作土〕
5 高灰色粘質土〔水田床土〕
6 明高灰色粘質土〔水田床土〕
7 暗茶灰色粘質土
8 暗茶色粘質土〔土層小礫片を多く含む〕
9 高灰色粘質土〔土層小礫片を多く含む〕
10 灰色砂質土〔一部層状に9層を含む〕
11 灰色粘質土
12 黄灰色砂質土〔一部層状に9層を含む〕
13 黄灰色砂質土〔一部層状に34層を含む〕
14 明高灰色粘質土〔土層を多く含む〕
15 灰色粘質土〔ブロック状に黄灰色粘質土を含む〕
16 黒灰色粘質土
17 黒灰色粘質土
18 淡灰色砂〔一部層状に17層を含む〕
19 淡灰色砂〔一部黄色砂を含む〕
20 暗黒灰色粘質土
21 淡黄褐色シルト質土
22 黒灰色粘質土
23 黒灰色粘質土</p> | <p>24 黒灰色粘質土
25 17層と21層が互層を形成
26 暗黒灰色粘質土〔層状に19層を含む〕
27 灰色粘質土
28 淡灰色砂質土〔一部、層状に16層を含む〕
29 暗灰色粘質土
30 黒灰色粘質土〔ブロック状に淡灰色粘土を含む〕
31 潔白灰色砂
32 潔白灰色砂
33 潔白灰色粘質土
34 黒灰色粘質土
35 灰色粘質土
36 灰色粘質土〔一部36層がブロック状に混入。部分的に多量に土層を混入する黄灰色砂質土が層状に入る。〕
37 高灰色粘質土〔一部、層状に高灰色砂あり〕
38 潔白灰色砂質土
39 灰色粘質土
40 灰色粘質土
41 潔白灰色砂
42 灰白色砂〔土層を多く含む〕
43 灰白色粘質土
44 赤茶色砂
45 灰白色砂質土
46 淡灰色粘質土
47 赤茶色粘質土</p> | <p>埋遺物取り上げ土層
3層～6層：表土 7層：暗茶灰色土
8層～9層：5-1 暗茶色土
10層～13層：5-1 潔白灰色砂質土
14層～15層：5-10 暗黒灰色粘土
16層：5-10 黒灰色砂質土
17層：5-10 黒灰色粘質土
18層～19層：5-10 潔白灰色砂質土
20層・25層：5-10 黒灰色粘質土
21層：遺物無し 23層：5-10 灰色粘質土
24層：遺物無し 26層：5-10 淡黄色砂質土
27層～29層：5-10 黒灰色砂質土
5-10 赤茶色砂〔A3区のみ検出〕
30層 5-10 白色砂質土 31層 5-20 白色砂
32層 5-10 白色砂質土
33層 38層 40層 5-20 灰褐色シルト
34層 5-10 灰色粘質土 35層 5-4 暗灰色粘土
36層 5-4 黒灰色粘土 37層 5-4 灰色砂質土
38層 5-20 白色砂
40層～47層：5-20 灰褐色シルト下層
=5-20 赤茶色砂</p> |
|---|--|--|

図5. 大宰府条坊跡第 259 次基本土層図

259SD005 調査区東部に検出した遺構で、259SD010の下位に検出した遺構。下位より茶灰色粘質土→灰色粘質土（土器を多量に混入する黄灰色砂質土混入）→灰色粘質土が堆積している。

259SD010 調査区中央で検出した遺構で、確認した溝遺構の中で259SD006より後出し、他の遺構に先行する。粘質土と砂、シルト系の土の互層状態で観察でき、一定の流速変化を伴いつつ水が流れていたものと考えられる。

259SD020 もっとも下位に検出した溝で、259SD020→259SD005→259SD010の前後関係にある。遺構としては一括しているが、砂→粘質土の上方細粒化傾向の堆積ユニットが複数観察できることから、流向を変えつつ水が流れていたことが想定できる。

(4) 出土遺物

1) 溝出土遺物

259SD005 暗灰色粘土（図6）

図6. 259SD005 暗灰色粘土出土遺物実測図

須恵器

蓋 3(1) 口縁部から天井部までが残る破片で、口径復元できるほどの破片ではなかった。やや形骸化しつつある断面三角形の口縁部形態を有する。天井部外面に回転ヘラ削り痕跡が観察できる。

坏 c(2・3) 両者ともやや潰れた断面三角形の高台を貼付する底部の破片で、外方へ開く体部形状を有するものと推定できる。底部外面にはナデ痕跡が観察できる。

皿 a(4) 平底の底部から外方へ直線的に開く体部へと移行するもので、底部外面は回転ナデによって仕上げられている。推定口径 18.0cm、器高 2.0cm、推定底径 14.0cm を測る。

高坏 (5) 口縁端部をやや内傾させる平坦面を形成する坏部の破片で、高坏と推定した。口縁部外面が暗灰色に変色している。

壺 (6～8) 6は、平らな底部形状を有し、底部内面には指頭圧痕、外面には同心円あて具痕跡が観察できる。7及び8は、口縁部の破片資料で、7は外面に施工工具を上下動させつつ施文する波状文が、8は外面に3条の沈線が施文される。

土師器

坏 c(9) 断面三角形の高台を貼付し、底部から丸みを帯びつつ体部へと移行する形状をとる。底部外面には回転ヘラ切り離し痕跡が観察できる。

壺 (10～12) 10は外反する口縁部のみの破片で詳細を明らかにすることはできないが、11は、直線的に立ち上がる体部から、外方へ緩やかに外反する口縁部へと移行する。体部内面は縦方向のヘラ削り、体部外面に縦方向の刷毛調整が観察できる。12は、やや胸張りのある体部から「く」字形に屈曲する頸部、外方へ開く口縁部へと移行する。体部内面は横方向のナデ、外面に刷毛調整の痕跡が観察できる。

石鍋 (13) 体部の破片資料で分類を明らかにすることはできない。器厚が厚く、大型の石鍋になるものと思われる。内外面ともに器面調整のための削り痕跡が観察でき、外面には煤状炭化物が付着している。滑石製。

瓦

平瓦 (14) 凸面に格子叩き、凹面に布目痕跡が観察できる。小破片のため詳細を明らかにできない。

丸瓦 (15) 平瓦同様に凸面に格子叩き、凹面に布目痕跡が観察できる。側面には、分割のための切込みと割取った時の破断状態が観察できる。

259SD005 黒灰色粘土 (図7)

須恵器

蓋 3(1・2) 両者とも口縁部から天井部まで残存し、口縁端部を断面三角形に作るもので、1は天井部外面を回転ヘラ削り、2は天井部外面をナデによって調整している。

坏 a(3) 底部の破片資料で平たい底部から外方へ開く体部へと移行するものと考えられ、底部外面に回転ヘラ切り痕跡と判読不明ながら墨書痕が観察できる。

皿 a(4) 底部から丸みを帯びつつ口縁部へ立ち上がり、口縁部はやや外反気味に開く。内外面ともに回転ナデによって仕上げている。

壺 (5) 大型の壺の底部で、平たい底部から大きく外方へ開く体部へと移行する。体部外面には平行叩き、内面及び底部外面に焼成時の降灰と考えられる自然釉が付着している。

土師器

坏 a(6) 平たい底部から外方へ大きく開く体部へ移行するもので、底部外面は回転ヘラ削り後、ナデによって仕上げている。

小坏 c(7) 断面四角形の高台を貼付するもので、底部外面はナデ調整によって仕上げられている。法

図 7. 259SD005 黒灰色粘土・259SD005 灰色砂質土出土遺物実測図

量から小型の坏 c と考えられる。

小形鉢 (8) 外方へ大きく開く体部に立ち上がる口縁部を有する鉢で、外面は器面摩耗のため明らかにし難いが、内面にはミガキ a が観察できる。形状から精製の鉢と考えられる。

高坏 (9) 坏部と脚部の接合部分の破片資料で、器面摩耗が著しく成形・調整の痕跡を明らかにし難い。

黒色土器 A 類

碗 (10) 丸く立ち上がる体部形態を有するもので、体部中位以上、内面全面を黒色化している。黒色化した部位にミガキ c 痕跡が僅かながら観察できる。

碗 c (11) 高台及び外方へ大きく開く体部へ移行するもので、体部形状については残存度合いが悪いため定かにし難い。内面にミガキ c 痕跡が観察できる。

緑釉陶器

皿 (12) 体部中位と考えられる箇所、一旦屈曲し外方へ開く口縁部へと移行し、内外面に灰緑褐色の釉薬が施されている。1mm 以下の白色砂粒を少量含み、緻密な素地特徴を有していることから緑釉陶器と判断したが、越州窯系青磁の可能性も残る。

瓦

平瓦 (13) 凸面に「平井」の文字を付す格子叩き、凹面に布目痕跡が観察でき、側面に分割のためのヘラ挿入痕と破断させた際の打ち割痕が観察できる。格子叩きおよび「平井」の文字から、九州歴史資料館分類の 9011a 型式と考えられる（九州歴史資料館、2000）。

259SD005 灰色砂質土（図 7）

須恵器

坏 c (14) 形状が形骸化し断面台形化した高台を貼付し、やや直立気味に外方へ立ち上がる体部へと移行するもので、底部外面は回転ナデ及び板状圧痕が観察できるとともに、「嘉麻是人」と判読できる墨書が観察できる。

土師器

甕 a (15) 体部下位に最大径を有するものと考えられ、頸部を「く」字に屈曲させ外方へ大きく開く口縁部へと至る。体部内面は右上方へと削り、口縁部内面は横方向の刷毛調整を行う。体部外面は縦方向の刷毛、口縁部外面には指頭圧痕跡が観察できる。

青磁

椀 (16) 低めの輪高台が削り出され、外方へ直線的に開く体部へと移行する。見込みならびに輪高台端部に目跡が残る、越州窯系青磁椀 I -2 種類。

259SD006 茶黄灰色土（図 8）

須恵器

坏 c (1) 断面台形の高台を貼付し、やや直立気味に上方へ立ち上がる体部へと移行するもので、底部切り離しは不明ながら板状圧痕が観察できる。

図 8. 259SD006 茶黄灰色土・黒灰色砂質土出土遺物実測図

壺 e(4) 肩部上面に環状に凸帯を巡らせるもので、頸部から口縁部下位の状況からややすぼまりながら口縁部へと移行するものと考えられる。

土師器

甕 (2・3) 頸部を「く」の字に屈曲させ、調整痕跡が観察できる2は、体部内面を縦ないしは右上方へ削り上げる。また体部外面には縦方向の刷毛痕跡が観察できる。

259SD006 黒灰色砂質土 (図8)

瓦

軒平瓦 (5) 軒頸部分に縄叩き痕が、凹面には布目痕跡が観察できる。瓦当部分の文様から老司Ⅱ式の560Ba型式と考えられる。

259SD010 黒灰色粘質土 (図9)

須恵器

坏 c(1) 断面長方形の高台を貼付し、底部から体部への移行が明瞭な屈曲をもって形づくられ、外方へやや直線的に開く体部形態を有する。内面には漆が付着している。

鉢 (2) 平らな底部からやや外反気味に外方へ開く体部形態を有する。底部外面に回転系切り離し痕跡を有し、胎土が精良であることから丹波窯窯産の製品と考えられる。

土師器

小皿 a1(3) 見込みで観察できる不定方向のナデによって底部が押し出されたもので、安定しない底部から外方へ大きく開く口縁部へと至る。底部切り離しは回転ヘラ切り。推定口径10.7cm、器高1.45cm、推定底径8.8cmを測る。

小皿 a2(4) 平らな底部から外方へ大きく開く口縁部へと至るもので、口縁端部を肥厚させることで口縁端部内面に溝状の窪みを形づくる。底部外面の切り離しは器面摩擦のため明らかにし難い。

丸底坏 a(5) 典型的な丸底坏とは言えないが、底部内面に不定方向のナデを施すことによって押し出し、丸底化を図っている。推定口径12.8cmを測る。底部外面の切り離しについては明らかにし難い。

黒色土器A類

碗 2(6) 体部下位から口縁部の破片で、口縁部内面にミガキbの痕跡、ならびに内面にミガキcの痕跡が観察できる。体部中位外面から器体内面にかけて黒色化。

碗 c2(7) やや内湾気味の外方に張り出す高台を貼付し、丸みを帯びた体部形態を有する。内外面ともに丁寧な回転ナデおよび不定方向のナデによって成形・調整され、内面にミガキc痕跡が観察できる。

黒色土器B類

碗 c2(8) 外方へ大きく張り出す高台を貼付し、外方へ大きく丸みを帯びつつ立ち上がる体部形態を有する。体部内外面にミガキcが観察できる。

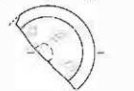
青磁

碗×鉢 (9) 9は、削り出しの平底からやや立ち上がり気味に上方へ開く体部形態を有するもので、高台脇ならびに内面に施軸され、見込み部分に目跡が観察できる。重ね焼きを想定した時、袋状の形態ではなく外方に開いたものが想定でき、ここでは確ないしは鉢として報告する。

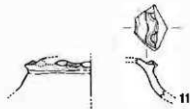
壺 (10) 10は、高台脇外面にのみ施軸されていることから壺と考えた。底部外面に目跡が残り、微細な砂粒を少量含むことからⅡ類の系統を引く生産地で作られた壺と考えられる。

香炉蓋 (11) 器体外面において天井部と口縁部との境界部分に擠み上げによる「ヒダ」状に形づくる凸帯を貼付するもので、外方へ大きく開く口縁部へと移行する。微細な砂粒を少量混入し、内外面に褐色の釉薬をかけている。

259SD010 黑灰色粘質土



259SD010 灰褐色砂質土



259SD010 黄白色砂質土

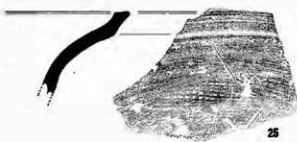
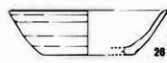
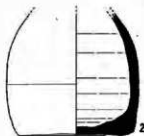
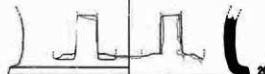
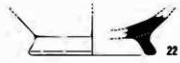
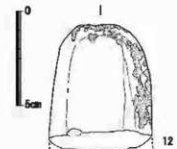
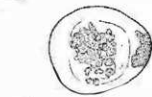


图 9. 259SD010 出土遺物実測図 (1)

石製品

石斧 (12) 刃部が欠損しているもので、器体表面に細かい叩打痕跡が観察できる。砂岩製。

259SD010 黄白色砂質土 (図9)

土師器

碗 c(13) やや外方に直線的に開く高台を貼付し、外方へ開く体部へ移行する。体部形態については明らかにし難い。

緑釉陶器

碗 (14) 直線的な体部から僅かに外反する口縁部へ移行するもので、内外面に淡緑灰色の釉が薄かけられている。

259SD010 灰黒色砂質土 (図9)

須恵器

坏 a(15) 平底からやや内湾気味に外方へ開き、口縁部へ至る。底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

坏×碗 (16・17) やや深めの印象を受ける口縁部の破片で、17は内面に漆が附着している。

坏 c(18) 断面台形の高台を貼付し、直線的に外方へ開く体部へと移行する。

円面硯 (19・20) 19は硯部の破片で、海部分に断面長方形の凸帯を貼付し、脚部への移行箇所断面三角形の凸帯を貼付している。脚部に四角形と考えられる透かしが形づくられている。20は脚部の破片資料で、若干外方へ張り出す脚端部形態を有し、脚部に四角形と考えられる透かしが外面側からヘラが差し込まれ形づくられている。

鉢 (21) 内湾気味な体部から口縁端部を肥厚させるもので、胎土が精良な特徴から丹波篠窯の製品と考えられる。

壺 (22～24) 22は、外方へ開く高台を貼付し、直線的に外方へ開く体部形態を有する。23は平底から内湾する体部形態をとる壺で底部外面には工具によるナデ痕跡が観察できる。24は短頸の壺aで、内外面に丁寧な回転ナデ痕跡が観察できる。

甕 b(25) 二重口縁を形づくる大形の甕で、口縁部外面に格子叩き痕跡が観察できる。

土師器

坏 a(26・27) 平底からやや内湾気味に口縁部へと至るもので、底部切り離しが観察できる27は回転ヘラ切り。26は推定口径12.6cmを測る。両者とも暗黄橙色を呈している。

坏 d(28) 平底から外方へ大きく開く体部形態をもつもので、体部下位に回転ヘラ削り痕跡、内面にミガキaが観察できる。

丸碗 (29・30) 体部下位に屈曲を有するもので、口縁部を僅かに外方に開く。29は、口縁端部内面にミガキb痕跡が僅かに観察できる。

碗×坏 (31) やや深めの印象を受ける体部から口縁部の破片資料で、内外面に回転ナデ痕跡が観察できる。

甕 a(32) 頸部から口縁部の破片資料で、体部内面には方向不明ながら削りの痕跡が、口縁部外面に横方向の刷毛、頸部に指頭圧痕と縦方向の刷毛目が観察できる。

黒色土器A類

碗 c(33・34) 高台を貼付し、外方へ大きく開く体部形態を有する。34は見込み部分にミガキcが観察できる。

黒色土器B類

图 10. 259SD010 出土遗物实测图 (2)

碗 c(35) 断面三角形のやや不安定な高台を貼付するもので、器面摩耗のため成形・調整痕跡は明らかにし難い。

259SD010 灰黒色砂質土 (図 10)

須恵器

甕 (40) 底部から体部下位の破片資料で、内面は指頭圧痕をとどめるものの、回転ナデによる成形、ナデによる調整を行っている。外面には平行叩きの後、回転力を利用した刷毛調整にて仕上げている。還元度がやや不良。

緑釉陶器

碗 (36) 体部下位の破片資料で、内面に窪ませることで凹線が描かれている。内外面に光沢のある緑黄色の釉薬を薄くかけている。近江産の製品と考えられる。

青磁

坏 (37) 外反する口縁部の破片で、口縁端部に僅かに輪花が観察できる。越州窯系青磁坏 I -1 類。

碗 (38) 底端部に輪高台を削り出すもので、畳付け部分の施釉をかきとる他は、内外面に施釉。見込み部分に目跡が残る。越州窯系青磁碗 I -2 ウ類。

石製品

石包丁 (39) 1/4 ほどが残るもので、穿たれた穴ならびに刃部が観察できる。粘板岩製。

259SD010 白色砂質土 (図 10)

須恵器

坏 c(41) 直立気味の高台を貼付するもので、体部も残存状況からは直立気味に立ち上がるものと推定できる。

土師器

碗 c(42) 断面三角形の高台を貼付し、丸みを帯びつつ立ち上がる体部形態を有する。器面摩耗のため十分な観察ができないが、高台脇には回転ヘラ削りが、内面にはミガキ痕跡が観察できる。

259SD010 赤茶色砂 (図 10)

須恵器

坏 (43) 口縁部の破片資料で、内面に回転ナデ痕跡が観察できる。

259SD010 灰色砂質土 (図 10)

須恵器

坏 (44) やや浅めの器高が想定され皿の可能性も残る。内面に漆が付着している。

土師器

碗 c(45) やや外方に張る高台を貼付し、外方へ立ち上がる体部へと移行する。器面摩耗のため成形・調整については明らかにし難い。

黒色土器 A 類

碗 c(46) 外方に張り出す高台形状を持ち、内湾気味に立ち上がる体部へと移行するものと考えられる。器面摩耗が著しいものの、見込み部分にミガキが観察できる。

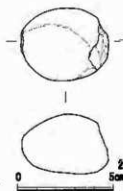
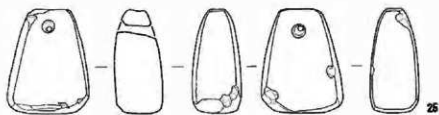
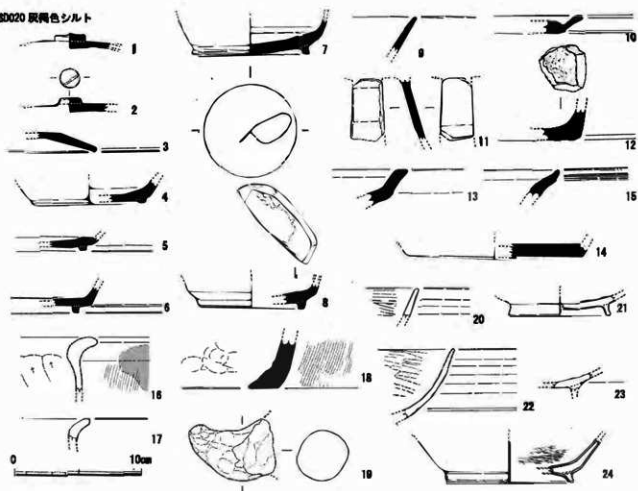
瓦

平瓦 (47) 凸面に格子叩きならびに「井」の文字が読み取れる。凹面は布目痕跡が観察できる。側面には分割の際のヘラ挿入痕跡と破断面が認められる。九州歴史資料館分類の 901Ga 型式と考えられる。

259SD020 灰褐色シルト (図 11)

須恵器

259SD020 灰褐色シルト



259SD020 赤茶色砂

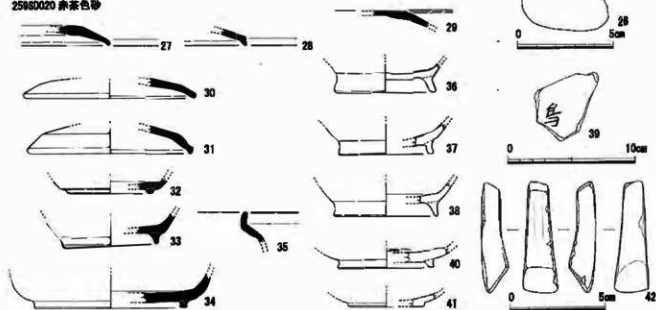


図 11. 259SD020 出土遺物実測図

蓋 c(1・2) いずれもボタン状のつまみを貼付するもので、1は天井部外面を回転ヘラ削りし、幾分宝珠形を保つのに対し、2は天井部外面をナデ調整し、つまみ頂部に直線のヘラを当てた痕跡が観察できる。

蓋 3(3) 形骸化しつつある丸みを帯びた断面三角形の口縁部形態を有し、天井部外面はナデ調整によって仕上げている。

坏 c(4～8) 断面台形から四角形を呈する高台を貼付し、底部と体部の境界が明瞭な6を除いて、いずれも丸みを帯びて移行している。7は底部外面に「楕円」を描いたようなヘラ書きが、8は内面に漆が付着している。

坏 (9) 外方へ開く口縁部の破片資料。外面が黒色化している。

皿 (10) 平底から大きく外方へ開く口縁部へ移行する。内外面ともに回転ナデによって仕上げている。

円面硯 (11) 円面硯の脚部の破片資料で、四角形と考えられる透かしを描き出しているものと考えられる。

壺 (12・14) 12は、平底から直立気味に立ち上がる体部下位の破片資料で、内面に白色の付着物がある。14は平底のみの破片資料で、底部外面を回転ヘラ削りによって仕上げている。

壺 d(13) 二重口縁の壺と判断される。内外面ともに回転ナデによって仕上げられ、外面が黒色化している。

甕 (15) 口縁部の破片資料で、口縁部外面に凹線が観察できる。

土師器

甕 a(16) あまり胴張りのないものと推定でき、頸部から外方へ開く口縁部を形づくる。体部内面は縦方向の削り、体部外面は縦方向の刷毛、口縁部は横ナデによって仕上げられている。

甕 (17) 口縁部を外方へ開く甕で、器面摩擦のため成形・調整痕跡を明らかにし難い。

甕 (18) 底端部を平坦に作り出すもので、外面は縦方向の刷毛、底端部内面は横方向の削り、内面は縦方向の削りの後、ナデによって仕上げられている。

把手 (19) 不定方向のナデによって成形されている。

黒色土器A類

碗 (20・22) 口縁部の破片で、いずれも内面にミガキcの痕跡が観察できる。

碗 c(21・23・24) いずれも高台を貼付するもので、24は外方へ張り出す高台に直線的に外方へ開く体部へと移行する。24のみ内面にミガキcが観察できる。

石製品

権 (25) 台形を呈するもので、上部に一箇所穴が穿たれている。表面は細かい削りによる成形と考えられるが、明らかにし難い。泥岩製で、71.1gを量る。

錘 (26) 楕円形の両端が欠損していることから錘と判断した。玄武岩製で68.4gを量る。

259SD020 赤茶色砂 (図 11)

須恵器

蓋 3(27・28・30・31) いずれも形骸化した断面三角形の口縁部形状を持つもので、天井部外面の成形・調整が多く観察できる。30・31は、いずれも回転ナデによって仕上げられている。

蓋 (29) 天井部のみの破片資料で、天井部外面の処理は他の資料と同じ。天井部内面に墨痕が観察できることから硯に転用されたものと考えられる。

坏 c(32～34) 断面四角形の高台を貼付する32・34、やや高めの高台を貼付する33がある。

壺 a(35) 短頸の壺aで、肩部の形状からあまり肩張りしない形状と推定できる。

土師器

椀 c1 (36～38) 高めの高台を貼付し、直線的に外方へ開く体部形態を有するものと考えられる。いずれも内外面の成形・調整は回転ナデ調整。

蓋 (39) 破片資料のため器としての全形を推定することはできないものの、内面に「鳥」「嶋」と考えられる墨書が観察できる。

黒色土器 A 類

椀 c (40) 断面台形の低めの高台を貼付し、見込み部分にミガキ c が観察できる。

緑釉陶器

皿 (41) 円盤状高台を有する皿と考えられ、内外面に淡緑白色の釉薬が施される。京都産の製品と考えられる。

石製品

砥石 (42) 4面に使用痕跡が観察できるもので、泥岩製。

2) その他の遺構出土遺物

259SX001 暗茶色土 (図 12)

須恵器

蓋 c (1) ボタン状に形骸化した宝珠形のつまみを貼付し、天井部外面は回転ヘラ削りによって仕上げている。

坏 c (2～5) いずれも、断面四角形の高台を貼付するもので、外方へ開く体部へ移行するものと考えられる。

椀 c (6) 他の個体と異なり、やや高めの高台を貼付するもので、高台のみの破片であることから全形を想定することが困難である。

皿 (7・8) 7は、平底から外方へ開く口縁部形態を有するもので、器面摩耗のため成形・調整痕跡を明

図 12. 259SX001 出土遺物実測図

らかにし難い。口縁端部内面から口縁部外面にかけて暗灰色に変色。8は、変色部分はないものの、同様の形状を呈する。

土師器

小皿 a(9) 平底から外方へ大きく開く体部へと移行する破片資料。器面摩耗のため、成形・調整については明らかにし難い。

椀 c(10) やや高めの高台を貼付するもので、器面摩耗のため、成形・調整については明らかにし難い。

甕 a(11) 頸部から口縁部の破片資料で、頸部から大きく外方へ開く形状を呈する。体部内面には方向が定かでないものの削り痕跡が、体部外面には右上がりながら縦方向の刷毛調整が観察できる。口縁部外面にも縦方向の刷毛調整が僅かに観察できる。

瓦

平瓦 (12) 凸面に格子叩き、凹面に布目痕が観察できる。

259SX001 淡白色砂質土 (図 12)

須恵器

甕 (13) 肩の張る体部から「く」の字形に屈曲させる頸部、そしてわずかに二重口縁を形づくる形状をもつ。体部外面には細かい格子叩き、体部内面には同心円あて具痕が観察できる。

土師器

甕 (14) 直立的な体部から大きく外方へ開く口縁部へと移行するもので、体部内面に縦方向の削りが観察できる。

黒色土器 A 類

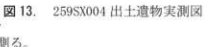
椀 c(15) 高台を貼付する椀を考えられるが、器面摩耗のため、成形・調整については明らかにし難い。

黒色土器 B 類

椀 c(16) 高台を貼付する椀を考えられるが、器面摩耗のため、成形・調整については明らかにし難い。

259SX004 暗灰色粘質土 (図 13)

石製品

スクレイパー (1) 刃部を細かい打ちカキによって作り出すもので、 259SX004 出土遺物実測図
サヌカイト製。長軸の長さ 4.9cm、短軸の長さ 3.1cm、厚さ 0.7cm を測る。

(5) 小結

調査範囲が狭小であり、かつ検出できた遺構が流路と考えられるものであったことから、詳細を検討することができない。

各遺構から出土した遺物から、当該調査区内で確認された遺構は、奈良時代から平安時代前期におさまる遺構で、政庁Ⅱ期に開削された水路と考えられるものである。調査区が狭小であり全貌をつかむことはできなかったが、南北に流れる水路であり、水路幅 2m ~ 3m を測ることから、一般的な坊路側溝とは規模が異なっている。

今後の周辺における調査情報を集積し位置づけを待ちたい。

図 13. 大宰府条坊跡第 259 次調査遺構略測図 (1)

図 14. 大宰府条坊跡第 259 次調査遺構略測図 (2)

2. 大宰府条坊跡 第290次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は、太宰府市都府楼南4丁目812-6、812-29、812-33、812-34、812-4の一部、812-32の一部である。対象地は遺跡包蔵地区のため太宰府市教育委員会による確認調査の結果、遺構が認められた。そのため遺構の保存を前提とした協議を進めた。開発業者が土地の地耐力検査を行ったところ、建物を建てる際の土地の地耐力が足りないため、地盤改良のため杭を打つ設計になったため、工事前に埋蔵文化財の発掘調査の実施が決定した。発掘調査は、専用住宅建設のため文化庁の補助を用いて発掘調査をおこなった。

調査期間は平成23年(2011)11月16日～同年12月12日。調査面積25.55㎡(対象面積239.86㎡)

(2) 基本土層 (図16)

調査地周辺はすでに土地の分譲区画がおわっており、対象地の東側と西側に既に新築建物が建っている状態のため、狭い調査区の中での限定的な調査となった。調査時の廃土持ち出しが出来なかったため、場内での反転調査をおこなった。当初に北部に調査区を設定し、その後反転して南部の調査を行った。そのため調査区同士は接合しない。

調査対象地は、大宰府条坊跡第259次調査(以下、条〇〇次と略す)の北側に隣接しており、条259・280・287・288次で確認された右郭4坊路の延長の検出が調査前に推測された。

調査時の地表面から-1.4mまでは攪乱土でガラと呼ばれる廃棄物を多く含んでいた。その攪乱土の下にはおおよそ0.2mから0.3mほどの厚さで耕作土、その下層に0.2mほどの茶色土(包含層)を確認した。この包含層を除去すると遺構面となる。よって現地表土から約1.6mの深さで遺構面を検出した。

(3) 検出遺構 (図15)

道路状遺構

290SF001

調査区のおよそ東半分を占める道路状遺構。調査区内では道路の西側の肩が南北5.4m検出されている。また道路部分として東西長約3mの範囲を検出した。西側の傾斜はゆるやかだが、調査区の東側にいたると急激に落ち込む。埋土は黒色土。埋没層の遺物は奈良時代から含むが、遺物の新しい要素としては黒色土器A類が確認できる。よって埋没時期は平安時代前期と推定される。推定右郭4坊路。

土坑

290SK005

調査区北西部に位置する方形の土坑で西側は調査区外に展開するため、全

図15. 大宰府条坊跡第290次遺構配置図

調査区北部北壁土層実測図



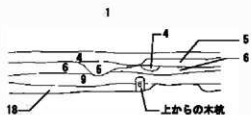
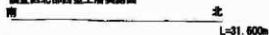
※土層観察内容については、
下記「調査区土層一覽」を
参照のこと

調査区北部南壁土層実測図



※土層観察内容については、
下記「調査区土層一覽」を
参照のこと

調査区北部西壁土層実測図



調査区土層一覽

1. 表土
2. 暗灰茶色土
3. 青灰色粘土
4. 青灰黒色土 (旧耕作土)
5. 暗茶灰色土
6. 明褐色土
7. 明茶色土 (茶色土と同層層)
8. 褐灰色土
9. 茶色土 (遺物包含層)
10. 茶黒灰色土 (砂質を含む)
11. 淡茶色土
12. 灰色土 (砂まじり) (290SF001 埋土)
13. 黒色土 (290SF001 埋土)
14. 灰色砂 (290SF001 埋土)
15. 暗黒色粘質土 (290SF001 埋土)
16. 暗褐色土 (S-2 埋土)
17. 黒褐色土 (白色粘土まじり)
18. 灰黒色土 (灰色粘土まじり)

調査区南部西壁土層実測図

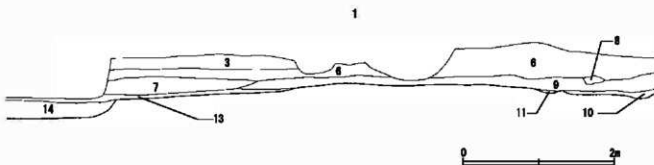


図 16. 大宰府条坊跡第 290 次基本土層図

容は不明。東西 2.5m 以上、南北 2m、深さ 0.2m ほどの浅く広がる土坑。遺物より 9 世紀頃に埋没したと考えられる。

(4) 出土遺物

1) 道路状遺構出土遺物

290SF001 (図 17)

土師器

皿 c (1～2) 貼り付け高台。ともに表面は摩滅しており、調整は不明瞭。1 に比べて 2 は器壁が厚く大振りのものとなる可能性がある。

椀 c (3) 貼り付け高台。高台は外側に強く張るもの。

石製品

基石 (4) 縦 1.4 cm、横 1.1 cm、厚み 0.4 cm。色調は淡青緑色。石材はチャート。丸みを持つ平石で表面は平滑であることから基石の可能性はある。

2) 土坑出土遺物

290SK005 (図 17)

青磁

越州窯系青磁 (5) 底部から体部の破片。復元底径 8.4 cm、削り出し高台。全面に施釉するが、内面底部に重ね焼きの目跡が残る。また高台の畳付け部にも同様の目跡が確認できる。焼成良好。釉の色調は、内面外面ともに淡黄褐色を呈し、断面は淡灰色である。素地は 0.1～0.5 mm の白色砂粒子を含む。細かな空隙がやや見られる。精良。釉調は、透明度はやや高い。光沢度はやわらかい。内面が風化し、擦痕が見られる。I-2 ア類。

図 17. 大宰府条坊跡第 290 次出土遺物実測図

3) 土層出土遺物

茶色土 (図 17)

土師器

坏 c (6.7) 6は復元口径13.0cm、器高3.3cm、復元底径7.0cm、貼り付け高台。7は復元口径13.2、器高4.25cm、復元底径7.4cm、貼り付け高台。

椀 c (8) 高台部破片。復元底径7.2cm。

甕 (9) 残存高3.8cm。くの字型を呈す口縁部。

把手 (10) 甕か甔の把手と思われる。小型で上部に向かって反っており、先端はやや尖っている。また把手部の断面は方形を呈す。

表土 (図 15)

白磁

椀×坏 (11) 口縁部破片。口縁端部に向かってやや外反する。全面に施釉、色調は内外面及び断面ともに、灰黄色。釉調は、内外面に透明の釉を薄く施す。光沢あり。素地は灰黄色で密。0.5mm以下の白色砂粒子をわずかに含む。精良。焼成は良好。

皿 (12) 口縁部破片。残存高0.6cm。口縁部は輪花状を呈す。輪花に対応して内面は浅く抉りが入る。色調は、内外面及び断面ともに白灰色。釉調は内外面に透明の釉を薄く施す。光沢あり。素地は白灰色で密。砂粒子をほぼ含まない。焼成良好。

青磁

椀×坏 (13) 口縁部の破片。残存高1.2cm。色調は内外面淡茶灰色、断面は灰黄色。釉調は、内外面に淡茶灰色の釉をうすく施す。光沢あり。素地は灰黄色で密。砂粒子をほぼ含まない。焼成は良好。龍泉窯系青磁。

(5) 小結

主要遺構としては、調査前に予想された推定右郭4坊路の西側が確認することができた。調査区西側に位置する290SK005から越州窯系青磁椀の破片が出土していることや、表土からも越州窯系青磁の破片出ていることから、9世紀代に調査区周辺で土地利用が行われたことがわかる。この290SK005の埋没後に、290SF001は埋まっていることが土層から確認できた。290SF001の埋土からは灰色砂が薄く帯状に堆積する痕跡も認められており、条259次で確認された道路通行面への補修痕跡の可能性が考えられる。近接した調査である条288次SF001において、推定右郭4坊路東側の落ち込みを確認しており、今回の成果と併せると推定右郭4坊路の道路幅としては、およそ13mとなる。これは南に100m以上離れた条280次、287次で検出された横幅と同程度の規模となるため、推定右郭4坊路の工事施工規模を推定する重要な調査成果と言える。

圖 18. 大宰府条坊跡第 290 次調査遺構略測図

表 4. 大宰府条坊跡第 290 次調査遺構一覽

表 5. 大宰府条坊跡第 290 次計測表

表 6. 大宰府条坊跡第 290 次調査出土遺物一覽

5-1	瓦	志	器 器3, 环, 瓦片, 甕
	土	師	器 器の破片, 环a, 陶器具, 甕,
	黑色土	器	器片 (器?)
	越前京系	青	器?
	白	器	器片
	瓦	器	平瓦 (筋子 I-e b, 無文),
	石	器	器片

5-1	黑色土		
瓦	志	器	器1, 器3, 环a, 环c, 甕
	土	師	器 c, 小甕, 煮炊具
	黑色土	器	A 陶c
	瓦	器	器a瓦, 平瓦 (筋子, I-e b)

5-2	瓦	志	器 器片
-----	---	---	------

5-3	土	師	器 器片
-----	---	---	------

5-4	瓦	志	器 器2, 供膳具, 甕, 甕,
	土	師	器 器片, 供膳具, 煮炊具
	黑色土	器	器 c?

5-5	瓦	志	器 器2, 甕
	土	師	器 器片, 供膳具, 甕片
	黑色土	器	A 破片
	越前京系	青	器 器 I-2?
	石	器	器片 (黒曜石)

5-6	瓦	志	器 器片
	土	師	器 器片

5-7	瓦	志	器 器, 环
	土	師	器 器片c, 环/器a, 供膳具, 煮炊具
	黑色土	器	器片

5-8	瓦	志	器 器?
	土	師	器 器片

5-9	瓦	志	器 器3, 器, 环a, 供膳具, 甕
	土	師	器 器, 供膳具, 煮炊具, 甕片
	黑色土	器	A 陶
	越前京系	青	器 I 甕
	瓦	器	平瓦 (筋子)
	石	器	供膳具破片
	土	師	器 器片

5-10	瓦	志	器 器成器? (再取状)
	土	師	器 供膳具, 甕片
	瓦	器	器 平瓦 (器片)

5-11	瓦	志	器 供膳具, 甕
	土	師	器 供膳具, 甕片
	黑色土	器	器 器?

黑色土			
瓦	志	器	器3, 器3+高环, 器, 器片a, 环c, 甕, 甕,
	土	師	器, 器+器
	土	師	器 c, 供膳具, 甕, 煮炊具, 把手
	黑色土	器	A 陶c, 甕片
	黑色土	器	A 陶c, 甕片
	白色土	器	器片?
	瓦	器	平瓦 (陶片), 平瓦 (無文), 丸瓦, 甕片
	石	器	器 器?

黑色土			
瓦	志	器	器3, 器3, 环c, 环, 甕, 甕, 小甕
	土	師	器 器 c x 环c, 供膳具, 煮炊具
	黑色土	器	A 甕片
	黑色土	器	B 甕片
	越前京系	青	器 器 I 甕, 陶器甕
	灰 綠 陶	器	器片
	白	器	器 x 环, 甕
	青	器	器 x 环
	紺 紫 磁	器	器片
	瓦	器	平瓦 (陶片), 甕片 (I-b L), 柱瓦,
	瓦	器	平瓦 (無文), 平瓦 (陶片)

3. 大宰府条坊跡 第319次調査

(1) 調査に至る経過

都府楼南5丁目888-16に所在し、専用住宅建設に伴い国庫補助事業として埋蔵文化財記録保存調査を実施した。開発対象面積は143.34㎡、調査面積は、35.8㎡を測る。調査期間は平成29年(2016)3月28日から同年4月14日、調査は遠藤茜、中村茂央が行った。

(2) 基本土層 (図19・20)

調査地は住宅街の中にあり、アスファルトを剥がすと明橙色の真砂土が厚く堆積する。その下に暗灰色土、暗灰黄色土、暗灰茶色土と遺物を多く含んだ黒褐色土が、遺構面である暗黒褐色土の上に堆積している。また、遺構面を形成する土層は、一部砂礫を含んだ暗黒褐色土であり、その下には炭化物を含んだ黒色粘土層がある。これらの層から遺構・遺物は確認できず、古くに有機物が堆積した結果できた層だと考え、その下位に灰黄色粘質土、灰色砂が広がっている。

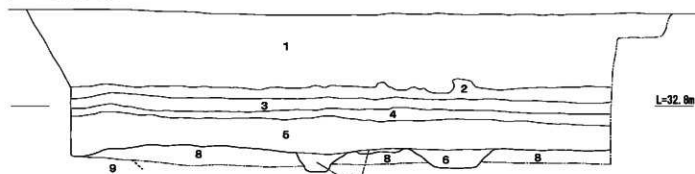
(3) 検出遺構 (図21)

溝

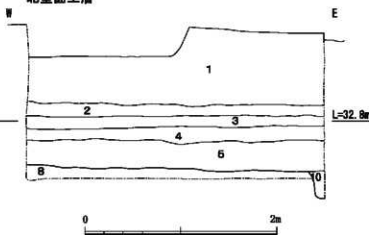
319SD005

幅0.60～1.40m、深さ0.20mの調査地の北側を東西に走る溝。遺構を検出する際、重機で深めに掘

S 西壁面土層



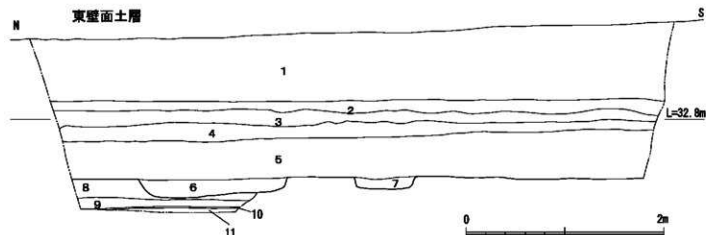
北壁面土層



条坊跡319次西壁面・北壁面土層

- | | | |
|----|---------|---|
| 1 | 明橙色土 | 粘性・締まりとも弱い。(真砂土) |
| 2 | 暗灰色土 | 粘性やや強く、締まりはやや弱い。
φ～5mmの礫を含む。微量に灰色砂を含む。 |
| 3 | 暗灰黄色土 | 粘性・締まりともやや強い。 |
| 4 | 暗灰茶色土 | 粘性・締まりともやや強い。
φ～5mmの礫を含む。 |
| 5 | 黒褐色土 | 粘性・締まりともやや強い。φ～5mmの礫を多量に含む。土層小片を多量に含む。 |
| 6 | 黒褐色砂礫土 | 粘性・締まりともやや弱い。
φ～5mmの礫を多量に含む。(S-5埋土) |
| 7 | 暗赤褐色砂礫土 | 粘性・締まりともやや弱。
φ～3mmの礫を含む。 |
| 8 | 暗黒褐色土 | 粘性・締まりともやや強い。
φ～3mmの礫を多量に含む。一部砂礫層 |
| 9 | 黒色粘土 | 粘性・締まりとも強い。黒色を中心とするが、一部高色が入り、炭化物を含む。 |
| 10 | 暗茶褐色土 | (S-7埋土) |

図19. 大宰府条坊跡第319次基本土層図(1)



藤原坊319次東壁面土層

- | | | |
|----|--------|---|
| 1 | 明褐色土 | 粘性・締まりとも弱い。(真砂土) |
| 2 | 暗灰黄色土 | 粘性やや強く、締まりはやや強いφ~5mm大の礫を含む。微量に灰色砂を含む。 |
| 3 | 暗灰黄色土 | 粘性・締まりともやや強い。遺物を含む。赤色マンガンを含む。 |
| 4 | 暗灰黄色土 | 粘性・締まりもやや強い。φ~5mm大の礫を含む。 |
| 5 | 黒褐色土 | 粘性・締まりともやや強い。φ~5mm大の礫を多量に含む。土器小片を多量に含む。 |
| 6 | 黒褐色砂礫土 | 粘性・締まりともやや弱い。φ~5mm大の礫を多量に含む。(S-5埋土) |
| 7 | 暗茶褐色土 | (S-1埋土) |
| 8 | 暗黒褐色土 | 粘性・締まりともやや強い。φ~3mm大の礫を多量に含む。一部砂礫層。 |
| 9 | 黒色粘土 | 粘性・締まりとも強い。黒色を中心とするが、一部茶色が入り、炭化物を含む。 |
| 10 | 灰色砂 | 粘性・締まりとも弱い。 |
| 11 | 灰黄色粘質土 | 粘性・締まりとも強い。灰色土、黄色土がまだらに見られる。 |

図 20. 大宰府条坊跡第 319 次基本土層図 (2)

削したため、溝の西側は浅くなり一部途切れるが、東壁面に続きが確認できる。埋土は、黒褐色砂礫土の単層である。

319SD008

幅 0.30 ~ 0.55m、深さ 0.20m の東西に走る溝である。319SD005 と同じく遺構面を深めに掘削しているため、溝の両端が途切れている。西壁面には溝の続きが確認できるが、東壁面は小穴が切り込んでおり、調査区外に続くものと考えられる。

土坑

319SK004

調査区の南端で検出した平面楕円形の土坑である。南北 1.5m 以上、東西 1.4m、深さ 0.13m を測る。埋土は黒褐色砂礫土の単層である。

その他の遺構・小穴

319SX011

調査地西側で検出した小穴である。埋土は暗茶褐色土の単層である。法量は直径 0.60m、深さは 0.38m を測る。319SX011 以外に同規模以下のものが複数見られ、いずれも同じ色の埋土である。

(4) 出土遺物

1) 溝出土遺物

319SD005 (図 22)

須恵器

坏 c (1) 復元口径 13.6 cm、器高 3.6 cm、底径 9.2 cm を測る。底部からやや上方に緩やかに立ち上が

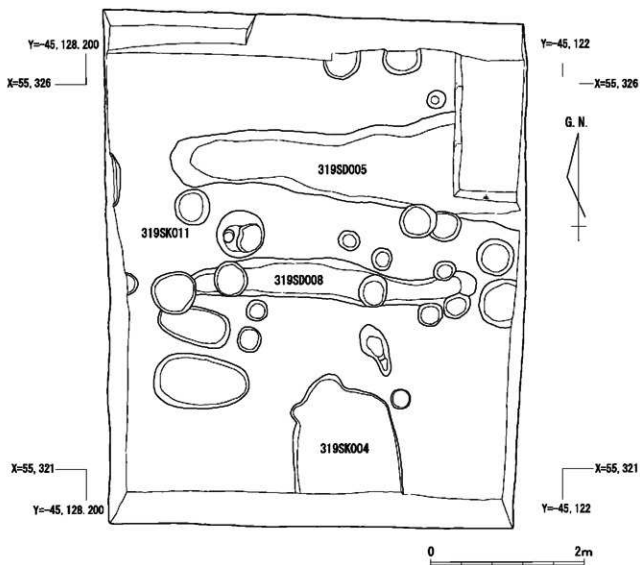


図 21. 大宰府条坊跡第 319 次遺構配置図

る体部形態で、内面内外面には回転ナデ、内面底部には不定方向のナデが観察できる。外面底部はヘラ切りの後、高台を貼り付けている。

土師器

坏 (2) 口縁部のみの破片資料である。口縁部は内湾する。表面は摩耗しているが内面に磨きが観察できる。

2) 土坑出土遺物

319SK004 (図 22)

須恵器

坏 (3) 口縁部のみの破片である。内外面に回転ナデが観察でき、外面が暗灰色に変色している。

甕 (4) 外方に開き、口縁部は肥厚させ、外面が灰黒色に変色している箇所がある。

高坏 (5) 脚部のみの破片で、脚端部を断面三角形に仕上げている。内外面ともに回転ナデの痕跡を観察できる。

土師器

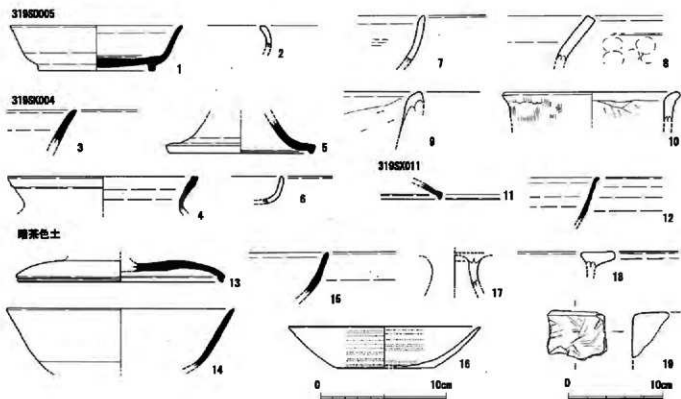


図 22. 大宰府条坊跡第 319 次遺構出土遺物実測図

皿 b (6) 口縁部は内湾気味にやや外方に開く。内外面に横ナデが観察できる。

坏 (7) 口縁部はやや外方に開く。表面は摩耗が激しく、内面の一部にミガキ痕跡が観察できる。

甕×鍋 (8) 口縁部だけの破片資料で器種特定には不安があるが、内面に口縁部に横ナデ、その下位に横方向の強いケズリが残ることから煮炊具と判断した。

甕 (9) 口縁部の破片で口縁部が大きく外方する。内面は横ナデ、外面は横ナデの後、指頭圧痕が観察できる。口縁端部付近には煤が付着している。

甕 a (10) 小さく頸部を「く」の字形に屈曲させたもので、口縁部の頂部付近は横ナデ、内面には斜め方向のケズリ、外面には縦方向のハケ目が観察できる。

3) その他の遺構出土遺物

319SX011 (図 22)

須恵器

蓋 (11) 断面三角形を呈する口縁部形態を有する蓋。

椀 (12) 口縁部が外反するものである。内外面ともに回転ナデが観察できる。

4) 土層出土遺物

暗茶色土 (図 22)

須恵器

蓋 c3 (13) 口縁部から天井部までの破片である。復元口径 16.3 cm、残存高 1.7 cm を測る。口縁部は回転ナデ、内面の天井部には不定方向のナデが観察される。外面天井部は回転ヘラケズリとつまみを貼

り付けた際のナデが観察できる。

椀×坏 (14・15) 14は口縁部から体部にかけての破片である。復元口径は18.0 cm、残存高4.7 cmを測る。色調は灰色で、胎土は精製されている。内外面とも回転ナデが観察でき、外面の底部付近に回転ヘラケズリが観察できる。15は口縁部の破片である。残存高は3.5 cmを測り、色調は灰色で、胎土に0.1 cm以下の白色砂粒子を含む。内外面ともに回転ナデが観察できる。

土師器

坏d (16) 復元口径15.2 cm、器高3.3 cm、底径7.4 cmを測る。内外面とも回転ヘラミガキが観察できる。外面底部は回転ヘラケズリが観察できる。

高坏 (17) 脚部の破片資料である。内面は回転ナデと受け部を取り付けるためについた指頭厚痕が残る。外面は回転ナデが観察できる。

甕 (18) 弥生土器の甕の口縁部である。内外面ともに摩擦が激しいが一部に横ナデが観察できる。形状から弥生時代中期のものと考えられる。

石製品

砥石 (19) 縦3.2 cm、横2.6 cm、厚さ2.0 cmを測る。砥石面は2面残っており、細かな線状の擦痕が観察できる。石材は、玄武岩である。

(5) 小結

第319次調査は大宰府条坊の右郭4坊20条にあたる場所で、確認できた遺構は奈良時代から平安時代の遺構である。このうち、調査地中央で検出したSD005、SD008は東西に並行してのびる溝で、調査地外に続くことが分かっている。溝の幅は異なるが深さはほぼ同じであり、どちらも黒褐色砂礫土の埋土が堆積している状態で、時期も同じ頃と考えられる。調査面積の限りもあり、遺構の性格を位置づけることは難しいが、区画溝に関わる可能性があげられる。また、溝が埋没した後は、建物や柵を構成すると考えられる小穴が複数みられ、土地利用に変化がみられる。

表7. 大宰府条坊跡第319次調査出土遺物一覧

5-1 土師 甕・高坏片	5-2 土師 甕・高坏片
5-2 土師 甕・高坏片	5-11 瓦 甕・高坏片、伊羅瓦 土師 甕・高坏片、甕、高坏片
5-3 土師 甕・高坏片	5-12 土師 甕・高坏片 石 製 品、自然石片 土 師 製 品、スレート
5-4 瓦 甕・高坏片 土師 甕・高坏片、甕、高坏片	雑瓦土 瓦 甕 脚、坪c、坪、坪×高c、高c、坪b、 甕×坪、甕、甕 (断片あり、面地不明) 土 師 製 品×高c、坪c、坪d、高c、甕、高坏 土 師 製 品、高坏片 瓦 坪、平瓦 (両目)、平瓦 (佛子1-Cc) 石 製 品、丸石
5-5 瓦 甕・高坏片、甕、高坏片 土師 甕・高坏片、坪b、甕	雑瓦土 瓦 甕 脚、坪a、坪c、高c、高d、甕、 小甕、高d、ハソウ?
5-6 土師 甕・高坏片、瓦、高坏片	土 師 製 品、小甕g?、坪c、坪d、丸坏、甕 土 師 製 品、伊羅瓦カマド 石 製 品、チャートア (細断片) 自然石片、石製自然石片
5-7 土師 甕・高坏片、瓦、高坏片	雑瓦土 土 師 製 品、丸坏g、伊羅瓦、高坏片
5-8 瓦 甕・高坏片 (伊羅瓦) 土師 甕・高坏片	

表 8. 大宰府条坊跡第 319 次調査遺構一覧

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
1		ピット	暗茶褐色土		B2
2		ピット	暗茶褐色土 S-8→2		B2
3		ピット	暗茶褐色土		A2
4	319SK004	ピット	黒褐色砂礫土	8c後半~9c初	A2
5	319SD005	溝	黒褐色砂礫土 S-6→5	8c後半~9c初	B2・3
6		ピット	暗茶褐色土 S-6→5		B2
7		ピット	暗茶褐色土		C2
8	319SD008	溝	黒褐色砂礫土 S-8→2・9	奈良時代	B・C2・3
9		ピット	暗茶褐色土 S-8→9		B3
欠番					
11	319SX011	ピット	暗茶褐色土	8世紀代	B3
12		ピット	暗茶褐色土		B2

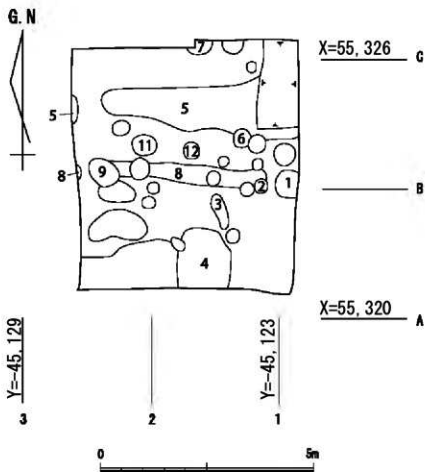


図 23. 大宰府条坊跡第 319 次調査遺構略測図

4. 大宰府糸坊跡 第 343 次調査

(1) 調査に至る経過

都府楼南 2 丁目 518-2 外 1 筆に所在し、専用住宅建設に伴い国庫補助事業として埋蔵文化財記録保存調査を実施した。開発対象面積は 302.32 m²、調査面積は、127.3 m²を測る。調査期間は令和 3 年 (2021) 8 月 30 日から同年 10 月 15 日、調査は山村信榮、木村純也が行い、報告を福盛雅久が担当した。

(2) 基本土層 (図 25)

標高 29.6 m の地表面から 0.7 m ほどの真砂土の盛土がされる。真砂土除去後は、0.3 m ほどの旧耕作土あり、標高 28.6 m から遺構が検出される。包含層は確認できない。遺構下には黄色土の地山が西側に広がり、東側には青灰色の地山が広がる。遺構面直上は灰色土で取り上げた。

(3) 検出遺構 (図 24)

その他遺構

343SX001

調査区中央で見つかった流路である。腐植土壌や粘質土主体で堆積する。地表より 2.5 m を超える黒色の腐植土壌が確認され、今回の調査では完掘に至っていない。

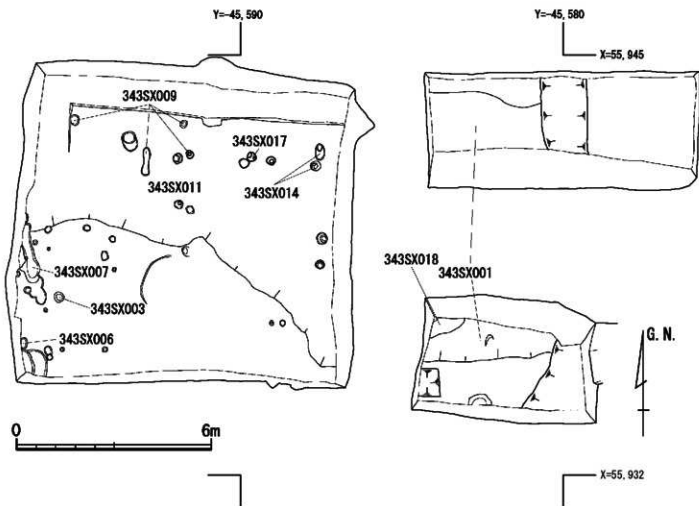
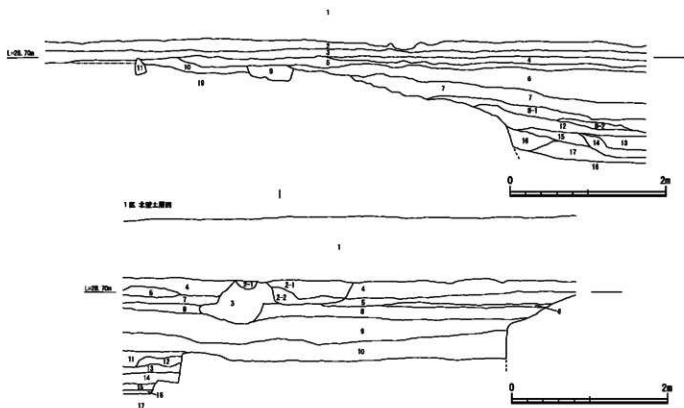


図 24. 大宰府糸坊跡第 343 次遺構配置図



■条坊343次1区 西壁土層

1 明褐色土	10 灰色土（黄色土ブロック混じり）	1層 真砂土盛土盛地
2 青灰色土	11 黒色土（炭粒入）	2層～4層 旧耕作土
3 灰色土	12 暗黒色粘土	5層～10層 S-1 暗灰土
4 灰白色土	13 淡灰色粘土	11層～17層 S-1 黒粘
5 黒灰色土	14 淡黒灰色粘土（黄色土ブロック混じり）	18層以下 未掘
6 暗灰色粘土	15 灰色砂質土	19層 地山
7 黒灰色粘土	16 淡灰色粘土	
8-1 黒灰色粘土（黄色土ブロック混じり）	17 黒色粘土（炭混じり）	
8-2 淡黒色粘土	18 淡灰粘土	
9 黒色土	19 黄色土	

■条坊343次1区 北壁土層

1 明褐色土	10 黒灰色粘土	1層 真砂土盛土盛地
2-1 暗灰土	11 黒灰色粘土（黄色土ブロック混じり）	2層～7層 旧耕作土
2-2 灰白色土	12 淡黒色粘土	8層～12層 S-1 暗灰土
3 青灰色土（土塊汚染土）	13 暗黒色粘土	13層～16層 S-1 黒粘
4 青灰色土	14 淡黒色粘土	17層以下 未掘
5 灰色土	15 淡黒灰色粘土（黄色土ブロック混じり）	
6 茶色土	16 黒色粘土（炭混じり）	
7 灰白色土	17 淡灰色粘土	
8 黒灰色土		
9 暗灰色土		

図 25. 大宰府条坊跡第 343 次基本土層図

(4) 出土遺物

1) その他の遺構出土遺物

343SX001 暗灰色粘土 (図 26)

須恵器

坏蓋 (1・2) 復元口径は 11～12 cm。天井部外面は回転ヘラ削り、口縁にかけて回転ナデを施す。2は廃棄後、硯として転用。天井内面と口縁部画面付近に墨痕が残る。

蓋 (3～7) 3～5は蓋 1。3は口縁径 16 cm。口縁は回転ナデを施す。6・7は蓋 3。天井外面は回転ヘラ削り、口縁は回転ナデを施す。

坏身 (8) 復元口径 14.2 cm。底部外面は回転ヘラ削り、口縁にかけて回転ナデを施す。口縁端部は丸みを帯び、立ち上がる。

坏 c (9～12) 9・10は復元高台径 8～9 cm。高台を貼り付けるためナデ調整を施す。10は、焼成ならびに還元不良のため土師質である。11・12は復元高台径 12 cm。底部外面は回転ヘラ削り後、体部外面から内面までナデ調整を施す。

坏 (13・14) 13は復元口縁径 11.6 cm。ナデ調整を施す。

碗 (15) 体部から底部にかけて丸みを帯びる。口縁はやや外反し丸みを帯びる。

高坏 (17・18) 坏部は底部に回転ヘラ削り、体部にかけ回転ナデを施す。脚部は回転ナデを施す。坏部と脚部の接合部はナデを施す。

壺 (19) 口縁はやや外反し、強めの横方向のナデを施す。

土師器

高坏 (20) 坏部底部のみ残存。摩耗により調整は不明。

甕 (21～25) 甕は口縁部のみ残存。大きく外反するものと、垂直に近く立ち上がる二種が出土。21・23は内面で斜め方向のナデ調整を施す。

壺 (26) 体部のみ残存。把手を貼り付けた痕跡が残る。内面は回転ナデを施す。

灰陶陶器

碗 (16) 口縁のみ残存。口縁下で外反する。表面は摩滅するが、内面の一部に釉薬が残る。

石製品

基石 (27) 直径 1.5 cmを測る基石。石材は、緑色片岩の可能性はある。

343SX001 黒色粘土 (図 26)

須恵器

蓋 (28) 復元口径は 15.0 cm。返りを持つ。焼成不良のため土師質である。

坏身 (29) 復元口径は 13.0 cm。ナデを施す。

壺 (30) 体部のみ残存。最大径 15.0 cmを測る。内外面ともに回転ナデを施す。

343SX001 暗灰色土 (図 27)

須恵器

蓋 c (31) 復元口径 13.0 cm、器高 2.7 cm、天井部径 8.4 cmを測る。天井部外面は回転ヘラ削りを行い、口縁部にはナデを行う。

坏 a (32) 復元口径 11.2 cm、器高 2.4 cm、底部径 9 cm。体部から口縁部にかけてやや外反する。ナデ調整を施す。

坏 c (33～35) 33は口径 11 cm。体部から口縁にかけてやや外反しナデを施す。35は焼け歪みしている。復元口径 13.5 cm、器高 5～5.1 cm、高台径 9.2 cm。高台は付け足しており、ナデを施す。

343SX001 暗灰色黏土

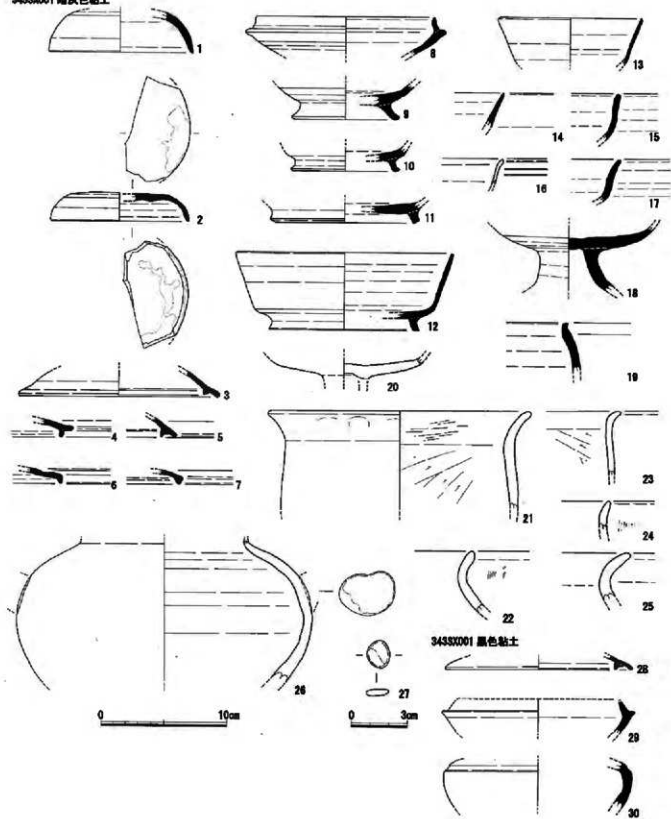


图 26. 343SX001 暗灰色黏土·黑色黏土出土遺物実測図

大坏 (36) 復元口径 18 cm。口縁直下より外反する。体部には三条の沈線を施す。口縁から内面にかけてナデを施す。

小坏 a (37) 復元口径 10 cm、器高 3.1 cm、底部径 7.0 cm を測る。底部はへら切り、体部から内面にかけて回転ナデを施す。体部は外方向に開き、口縁は丸みを帯びる。

小坏 c (38) 復元底部径 6.6 cm。底部外面はへら切り後、高台を貼り付け、ナデを施す。

坏 (39) 復元口径 15.6 cm。体部は丸みを帯び、口縁直下から口縁にかけて外反する。体部には三条の沈線が観察できる。口縁・内面ともに回転ナデを施す。

鉢 a (40) 鉄鉢形。体部外面にはケズリ、口縁端部から内面に回転ナデを施す。内面には墨が付着する。

小鉢 (41) 口径 7.3 cm、器高 2.2 ~ 2.8 cm を測る。回転台を用いて成形のち、底部を押し出している。口縁直下から口縁端部にかけて外反する。底部外面は不定ナデ、体部から口縁部は横方向のナデを施す。

343SX001 暗灰色土

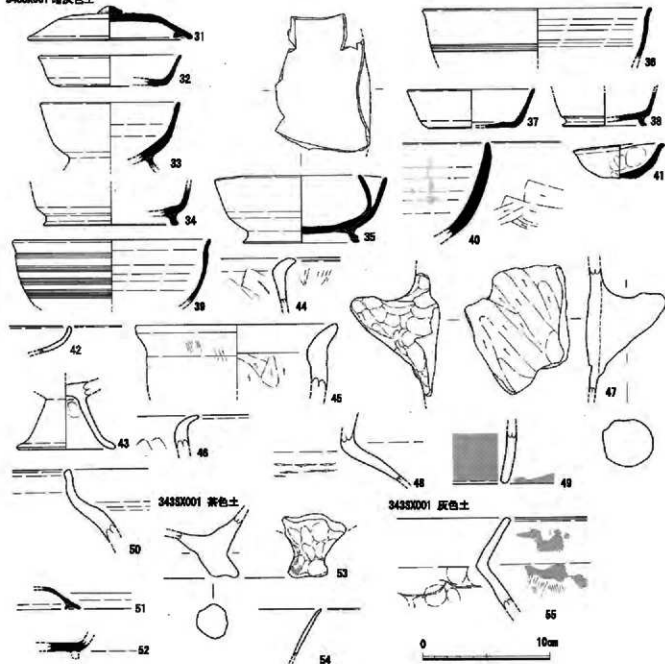


図 27. 343SX001 暗灰色土・灰色砂・茶色土出土遺物実測図

内面には不定ナデを施した指頭痕が残る。

土師器

皿(42) 底部から口縁にかけ丸みを帯びる。摩耗により調整は不明。

高坏(43) 脚部のみ残存。脚部径7.8cm。脚部・坏部接合部には工具痕が残る。脚部内外面はナデを施す。

壺(44～47) 口縁のみ残存。体部はやや丸みを帯びて立ち上がり、頸部より大きく外反する。体部内面には斜め方向の指ナデを施す。47は把手部のみ残存。内面に斜め方向のナデ調整を施す。

壺(48) 頸部から体部にかけて残存。頸部から体部にかけて丸みを帯びる。頸部直下の内面には、粘土のつなぎ目が残る。

甔(49) 脚部のみ残存。内面が黒色化する。表面調整は不明。被熱を受けたと考えられることから甔とした。表面にミガキが入る黒色土器A類の可能性も考えられる。

陶器

壺(50) 口縁から体部まで残存。肩部から体部にかけ厚みが増す。また、頸部にかけ、緩やかに立ち上がり、口縁はやや内反する。焼成は須恵質に焼き上げられている。

343SX001 茶色土(図27)

須恵器

蓋1(51) 口縁部のみ残存。返りのつく口縁である。つまみの有無は不明。天井部外面は回転ヘラ削りで、口縁から内面は回転ナデ調整を施す。

坏c(52) 底部のみ残存。高台部が剥離した面が残ることから、高台は後付けであると考えられる。高台の接合に際し、回転ナデ調整を施す。

土師器

壺×壺(53) 脚部のみ残存。指頭圧痕やナデ調整を不規則に施し、獣脚に成形する。器形を特定するに至らず、甔か壺の可能性が高いと考える。

陶器

碗(54) 口縁から体部にかけて残存。体部から口縁部にかけ外側に向かい直線状に立ち上がる。厚みは0.4cm前後と薄手。須恵質。

343SX001 灰色砂(図27)

土師器

壺(55) 口縁から頸部まで残存。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁は外側に向かい直線状に立ち上がる。内面には指頭圧痕がみられ、外面にはハケ目を施す。

343SX002(図28)

土師器

大坏a(1) 復元口径14.0cm。口縁端部はやや外反する。調整は摩滅して不明。復元口径からXI期と考えられる。

343SX003(図28)

白磁

碗(2) 体部外面は高台付近に回転ヘラ削りを、体部にかけては、蓮弁が施される。V類の可能性もある。

343SX006(図28)

緑釉陶器

碗(3) 体部から口縁部まで残存。須恵質の緻密な胎土。表面に黄緑色の釉薬が薄く残る。

343SX007(図28)

土師器

坏 c(4) 高台部から底部にかけて残存。調整は摩耗しており不明である。

343SX009 (図 28)

白磁

皿 (5) 口縁部のみ残存。口縁端部を折り曲げ内外面に施釉される。皿Ⅱ類の可能性ある。

343SX011 (図 28)

白磁

小皿 (6) 高台部のみ残存。高台は皿Ⅱ類に類似する高台を呈する。未分類。

343SX014 (図 28)

土師器

鍋 (7) 口縁部のみ残存。口縁端部を口縁直下外面側に巻き込み成形。横方向のナデ調整を施す。

343SX017 (図 28)

土師器

小皿 (8・9) 8は口径 8.4 cm、高さ 1.0 cm、底径 7.0 cmを測る。9は、口径 9.6 cm、底径 7.6 cm、高さ 0.95 cmを測る。

343SX018 (図 28)

須恵器

蓋 1(10) 口縁部のみ残存。口縁部は回転ナデ、天井部外面は回転ヘラ削りを施す。

2) 土層出土遺物

灰色土 (図 28)

須恵器

蓋 1(11) 天井部のつまみは不明。ヘラ記号が残る。

坏 c(12) 体部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる。高台接合の痕跡が確認できることから、坏 c と考えられる。

坏 (13) 底部から体部へ向かい、急激に立ち上がる。口縁は緩やかに外反する。体部から口縁の内に

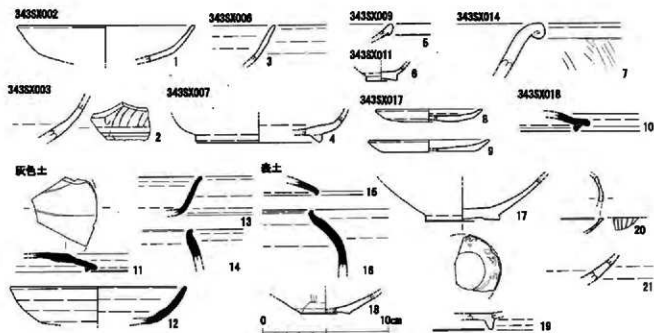


図 28. その他遺構、土層出土遺物実測図

回転ナデを施す。

壺 (14) 口縁部のみ残存。口縁は外反し、端部はやや尖る。内外面にはナデ調整を施す。

表土 (図 28)

須恵器

壺 3 (15) 口縁部のみ残存。端部は断面三角形を呈する。

壺 (16) 体部から口縁部にかけて残存。体部は大きく膨らみ回転ナデ調整を施す。口縁は外反し、端部はやや尖る。

青磁

椀 (17) 17 は高台径 3.0 cm を測る。高台の形状より越州窯系青磁の椀Ⅱ類と考えられる。

白磁

皿 (18) 胎土は灰色で小さな黒い粒がやや混じる。釉薬は光沢のあるやや緑の混じった白色を施す。高台の形状から皿Ⅱ類と考えられる。

白磁

椀 (19・21) 19 は、胎土は混じりの少ない明灰色を呈する。釉薬は白味の強い明灰色を施す。高台のみ残存。高台は高く削り出したものである。高台の形状から椀Ⅱ類の可能性が考えられる。21 は、体部下位の一部が残存。胎土は微細粒を少量含む白黄色である。釉調は内面に半透明の光沢のある釉があり、貫入がやや見受けられる。

紅皿 (20) 肥前系。口縁部から体部にかけて残存。胎土は精良で白色を呈する。釉調は半透明で光沢があり、内面から体部上位にかけ釉を施す。

(5) 小結

本調査では、鷲田川西岸に自然流路が見つかった。流路は鷲田川が氾濫したときに形成されたもので、流路には 8 世紀を下限とする土器が出土している。鷲田川付近の調査では、8 世紀を下限とする自然流路が見つかっており、本調査もその一つだと考えられる。このことから鷲田川の氾濫は 7 世紀後半から 8 紀前半に起こった可能性が高い。また付近の小穴群からは 12 世紀の土器が出土しており、鷲田川氾濫後、生活空間として利用されたと考えられる。

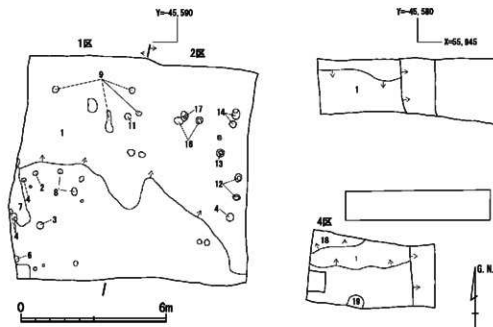


図 29. 大宰府条坊跡第 343 次調査遺構略測図

V. 結び

今回報告した4現場は、いずれも専用住宅建設に先立つ埋蔵文化財調査の成果である。

調査範囲が狭小であり、検出した遺構の性格まで十分把握するに足る情報を得ることができなかった。

各調査区の傾向として、近い場所である条坊跡 259 次・290 次・319 次調査区においては、おおむね奈良時代から平安時代中期の遺構が確認でき、離れた条坊跡第 343 次調査区では飛鳥時代末期の堆積層と考えられる 343SX001 や平安時代後期の遺構が確認されている。

確認できた遺構は、南北の水路で構成される条坊跡第 259 次調査、坊路と推定される 290SF001 を検出した第 290 次調査、東西の二条の溝を確認した第 319 次調査など、条坊痕跡を考える上で貴重な情報を得ることができた。

また、第 343 次調査では、近傍にある鷺田川の氾濫と考えられる大規模な堆積層を確認でき、条坊内で確認できる平安時代後期の大規模な氾濫の一端を知ることができた。

いずれにしても、限られた狭い調査区内での成果であるだけに、周辺地域、特に字「市ノ上」が大宰府条坊跡第 120 次調査を含め、大宰府の市場として推定でき得るほど多様な遺物を出土しており（大宰府市、2000）、市の「上（北）」にあたる区域として想定した時、第 259 次調査で検出した南北水路が単に坊路側溝とするには広い溝幅を有することなど、検討すべき課題を有している。

【引用文献】

大宰府市教育委員会（2000）『大宰府条坊跡 XIV - 「市ノ上」周辺の調査-』

写真図版

写真図版には遺構の主な写真を掲載している。その他の遺構写真および遺物写真は、付録のCDにカラー情報で収録している。



大宰府条坊跡第 259 次調査 調査区全景 路面検出時（上が北）



大宰府条坊跡第 259 次 SD020 完掘状況（南東から）



大宰府条坊跡第 290 次調査 調査区北部完掘状況（南から）



大宰府条坊跡第 290 次調査 調査区南部完掘状況（東から）



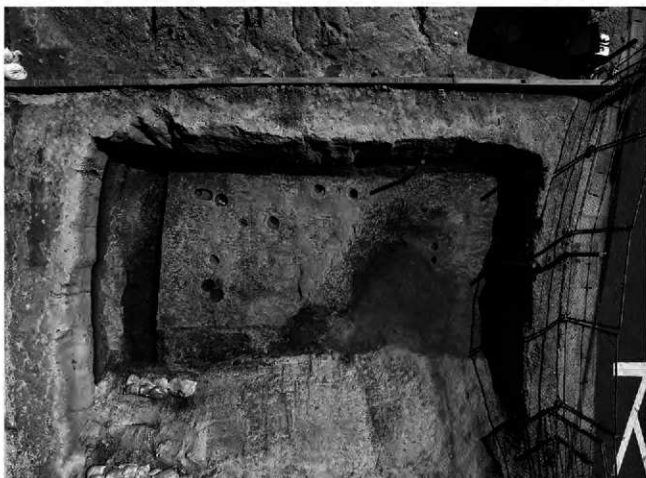
大宰府条坊跡第 319 次調査 A2・B2 完掘（南から）



大宰府条坊跡第 319 次調査 A3・B3 遺構完掘状況（南から）



大宰府条坊跡第 343 次調査 1 区全景 (東から)



大宰府条坊跡第 343 次調査 2 区調査区全景 (左が北)

報告書抄録

ふりがな	ださいふじょうぼうあと									
書名	大宰府条坊跡 52									
編者名	那珂徳南地区									
シリーズ名	大宰府市の文化財									
シリーズ番号	145集									
編者	高橋 学 中村茂典 福盛輝夫 中島恒次郎									
編集機関	大宰府市教育委員会									
所在地	福岡県大宰府市観世音寺1丁目1番1号									
発行年月日	2024(令和6)年3月31日									
ふりがな	坐落	ふりがな	コード	座標		調査期間		調査面積	調査原因	
所収遺跡名	【縮山指定案】	所在地	市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了	㎡	
ださいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡 第259次	右第45条4坊	とみちうみんみ 那珂徳南4丁目	402214	210050-259	55485.0	-45206.0	20060417	20060512	43.7	専用住宅建設
ださいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡 第290次	右第45条4坊	とみちうみんみ 那珂徳南4丁目	402214	210050-290	55499.0	-45204.0	20111116	20111212	25.96	専用住宅建設
ださいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡 第319次	右第47条3坊	那珂徳南4丁目 とみちうみんみ	402214	210050-319	55325.0	-45125.0	20160328	20160414	35.8	専用住宅建設
ださいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡 第343次	右第10条9・5坊	那珂徳南2丁目 とみちうみんみ	402214	210050-343	55935.0	-45935.8	20216830	20211015	127.3	専用住宅建設
所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
大宰府条坊跡 第259次	部城	奈良、平安	通路、小穴		土師器、須恵器、黒色土器 中国産陶磁器、国産陶器、瓦					
大宰府条坊跡 第290次	部城	奈良、平安	道路状遺構、土坑 小穴		土師器、須恵器、黒色土器 中国産陶器、国産陶器、瓦					
大宰府条坊跡 第319次	部城	奈良、平安	道路状遺構、土坑 小穴		土師器、須恵器、瓦					
大宰府条坊跡 第343次	部城	原始、古代 中世、近世	河川、小穴		土師器、須恵器、瓦					

大宰府市の文化財 第145集

大宰府条坊跡 52

-大宰府条坊跡第259・290・319・343次調査-

令和6年(2024)3月

編集 大宰府市教育委員会

発行 大宰府市観世音寺1丁目1番1号

印刷 福岡印刷株式会社

〒812-0892

福岡県福岡市博多区東那珂1丁目10番15号

